ワークシート　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　鎌田東二

スピリチュアリティ：

全体性（まるごと）、根源性（ねっこ）、深化・変容（ふかまり）をもたらす生の羅針盤（いのちのコンパス）

スピリチュアルケア：

嘘をつけない自分や他者と向き合うプロセス。「体は嘘をつかない。だが心は嘘をつく。そして魂は嘘をつけない。」あいだにあるはたらきを感知しつつ、まるごとの素の自分を見つめ、いのちの帰趨に向い合うこと。

「スピリチュアルケアの定義」　鎌田東二

　「スピリチュアリティspirituality」を日本語にどう訳すか、難問である。もちろん「霊性」と訳すことができるが、「霊性」とは何ぞやとなるとこれがまたなかなか難問である。あるいは、「いのちのはたらき」とか「道」と訳すこともできるかもしれないが、抽象化しすぎるとこれまた説明が必要であるし、なかなかむつかしいのである。

　そのように日本語に訳すことの難しい「スピリチュアリティ」を元にした「スピリチュアルケア　spiritual care」をこれまた日本語に翻訳するのも難儀である。「霊性の世話」？「たましいの配慮」？「いのちの介護」？　いずれもぴったりする訳語がないので、そのまま「スピリチュアルケア」とされてきた。

　本第8回日本スピリチュアル学会学術大会が高野山大学で開催されるからというわけではないが、これを弘法大師空海が開いたとされる四国遍路の八十八ヶ所めぐりの精神にならって、「同行二人」と置き換えてみると何が見えてくるか？　また「こころの道連れ」とか「いのちの気づき合い」とかとしてみると、そこにある大切なものが浮かび上がってくるかもしれない。つまり、「スピリチュアルケア」が本来的に包摂する他者性、仏教的に言えば、「上求菩提下化衆生」の自利・利他両備の菩薩道性である。「スピリチュアルケア」とは自己探求と対人援助の両者が分かち難く結びついているということである。

　さてわたしは、持論として、「スピリチュル」に関わる五則を次のように定立している。

１、スピリチュアリティ（霊性）の三要素は、①全体性（まるごと）、②根源性（ねっこ）、③深化・変容（ふかまり）、である。

２、スピリチュアリティ（霊性）とは、「生の羅針盤（いのちのコンパス）」であり、「道（Way）」である。

３、スピリチュアリティ（霊性）とは、「独り」でありつつ、「同行二人」である。

４、スピリチュアルケアとは、「あいだ」にあるはたらきを感知するスピリチュアリティ（霊性）の臨機応変的発動である。

５、スピリチュアルケアは、「生態智」（「自然に対する深く慎ましい畏怖・畏敬の念に基づく、暮らしの中での鋭敏な観察と経験によって練り上げられた、自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システムの技法と知恵」）によって磨かれる。

　「スピリチュアリティ」とは、「嘘をつけない自分や他者と向き合うプロセス」である。「体は嘘をつかない。だが心は嘘をつく。そして魂は嘘をつけない。」そこで、「あいだ」にあるはたらきを感知しつつ、まるごとの素の自分を見つめ、いのちの帰趨に向い合うことが「スピリチュアルケア」である。

最後に、「スピリチュアルケア」を日本で考え実践する場合の「日本的な制約」とは何かを考えておく必要がある。古来、日本人は「草木言語（くさきこととう）」と考え、それが「草木国土悉皆成仏」と命題化される天台本覚思想の日本的霊性論にまで発展した。したがって、このような文化風土における「スピリチュアルケア」とは必然的に「ナチュラルケアnatural cere」(healing through nature)とでもいうべき自然の力動の感受と深く結びついている。そこで、「人が癒す」つまり「人間関係の関わりの中で支えられ癒される」局面だけではなく、「自然が癒す」すなわち「自然と人間との関わりこそが癒しと支えの根幹となる」という事態があるということ、このことも「スピリチュアルケア」の問題として考えると必要があるだろう。